

K-8 東松島市宮戸月浜地区

2011年2月16日(木)

報告者名	大沼 知	被調査者生年	1948年(男)
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	海苔養殖業、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

平成24年のえんずのわりについての感想

今回のえんずのわりは、小学生のみでしかも3人しかいなかった状況の中で良くやっていたと感じている。特に大将は小学5年生ながら地域の伝統を守るという意識が感じ取れて感心している様子であった。震災の影響もあり、今回えんずのわりをやるのは正直言ってキツイしやなくてもいいんじゃないかと子ども達に言ったが、今年の大将は自分の孫だったが、「自分が大将の時に行事が途絶えるのは嫌だ」と言っていたことから頼もしさを感じていた。また、ご飯炊きが今までのえんずのわりの中で、一番上手に出来たのではないかとしきりに褒めていた。

今年は震災があって正直行事をやるとは思ってなく、従来通りの形式であったら出来なかったであろうと感じている。今年は水汲みもなく、寝泊りする場所も神社ではなく談話室であったため、そういったことも含めて行事を行うことができたのではないかと思っている。

昔は行事の際の唱え言も、大将が自分で考えて言っていたが、段々と行事に参加する子ども達の人数が少なくなってきたことから、高校生ら先輩に何を言っているかなど頼るようになったという。自身がえんずのわりをやっていた時は、大将という存在には絶対服従で、どんなことでも言うことを聞かなければいけなかった。また食事前に大将も風呂に入って身を清めていた神社でお参りしてからご飯を食べていた。またお神酒には新藁を3本さすのが決まりで、囲炉裏の砂も敷きかえた。

民宿再開について

自分達が60歳を超えて、今まで自営業をしてきた身であるから今から新たに誰かの下で働くというのはできない。震災後、瓦礫撤去作業に従事する前に友人の墓屋(墓石屋か?)で修理をしたりしていたが、人に使われるというのは並み大抵のことではなかったと語る。そんな中で民宿のいいところはその場で現金収入がのぞめるところだという。それ以外にも震災前と震災後を通して民宿のお客さんにいろいろと世話になったことが忘れられないと語り、長い付き合いのお客さんからは食べ物、飲み物、義援金などといった様々な支援をもらい、それに対して返せるものは何もないが、今のところ自身の夢は民宿を再開させて、これまでに世話になった人達を新しい民宿へ招待することで、それが恩返しにもなるのではと思っている。

民宿を再開するにあたって自身の構想では、以前よりも規模を小さくしてもいいと考えている。それにあたって東松島市が開いた1回目の懇談会で、高台移転についての説明の際に民宿業を営んでいる者として、土地の確保だけはどうかにならないのかと質問をしたが、返答としては要

検討とだけに留まっているらしい。ただ、個人的に市に赴いて移住先に店舗付で土地を提供してくれるやり方はないのかと聞いていて、市および国の方では土地に店舗を加えた形で申請ができるようになるかもしれないらしい。またそれに対しての補助金も出るかもしれないという。その際には何件かと名義だけでも組んで（民宿業同士が固まるのではなく、例えば商店、ラーメン屋などいった店舗営業希望者と組む）申請をするという形にすると補助の体制がすごく良いらしい。

第1回目の市からのアンケートで、月浜で民宿業の再開を希望したのが鈴木家の1軒のみだったが、それから何度か会議において民宿業の再開に関する質問や補助の願いを出していると、市からも対応を考える動きが出てきて、2回目のアンケートでは月浜での民宿再開希望が5軒に増えた。

津波を受けた浜の土地は市が一坪万円くらいで買い上げることになっている。「危険区域」であるから売るか売らないかは土地所有者が決定できるようだ。「危険区域」に建物を建てる際には4メートルほど盛り土で嵩上げし、建物も鉄筋などにする必要がある。それに必要な資金に補助がでるかといったところは不明だが、そこまでして元の浜に住むかは地域の人達にとっても微妙なところであるらしい。

月浜の青年団（青年会）について

話者が若いころは月浜にも青年団があり、いつの頃からか青年会と名称を変えた。女性も青年会には参加しても良いことになっており、お祭り（五十鈴神社の祭礼の時か。）の時に踊りを踊ったりしていた。踊りをやらなくなってからはカラオケ大会などをしてきた。こうした活動をしてきたのは話者が未婚の時、男女で集まって何かをするということは楽しかったそうである。